

京から「宇宙高校生」



「宇宙にいちばん近い高校」プロジェクトで、屋上で金星の太陽面通過を観測する洛陽工業高の生徒たち(6月6日、京都市南区)

洛陽工がプロジェクト

京都市南区の洛陽工業高が「宇宙にいちばん近い高校」をキャッチフレーズに天文教育のプロジェクトを始めた。生徒たちは金環日食などの天体観測に取り組んでおり、今後はロケットの製作と打ち上げにも挑む。「宇宙開発を担うリーダーを育てたい」という。

本年度からスタートにはチリ大が呼び掛けた理工系次世代リーダ国際共同企画に参加する「養成講座「ハイパシ」、理科の有本淳一教員「ステージ」の一環と、論の指導で1年生17人として、天文学、宇宙工が金星の太陽面通過を学の実習を進めてい観測した。大江一総ざる。5月21日の金環日食(16)は「金星の動きに続いて、6月6日きがかかって、すごい

天体観測やロケット製作 次世代リーダー育成

と思った。将来は、ずばる望遠鏡のような望遠鏡を作りたい」と目を輝かせていた。

今後、宇宙科学をテーマにした同好会を立ち上げて生徒たちが天体観測に取り組む一方、金属加工もできる実習棟がある教育環境を生かし、和歌山大と連携して同高で液体・固体燃料のハイブリッドロケットを製作し、打ち上げる計画だ。

恩田徹校長は「教科書では分からないことがたくさんある。宇宙の謎にチャレンジしてほしい」と話している。

(稲庭篤)